HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	対話 ： 「先住民族の包摂」と「先住民族化」の間で ： アオテアロア/ニュージーランド・マオリと アイヌの人々の「声」を聞くために ： 〈報告：2023年11月オンライン・シンポジウムから〉
Author(s)	岩佐, 奈々子
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 144, 65-91
Issue Date	2024-06-28
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.144.65
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/92703
Type	departmental bulletin paper
File Information	06-1882-1669-144.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

対話：「先住民族の包摂」と「先住民族化」の間で

― アオテアロア/ニュージーランド・マオリと アイヌの人々の「声」を聞くために ― 〈報告：2023年11月オンライン・シンポジウムから〉

岩　佐　奈々子*

【要旨】日本の先住民族であるアイヌ民族の人々への教育は，現在，日本の公教育が行われ，アイヌ民族に対する個別の教育は，1997年からアイヌ政策の下でアイヌ語とアイヌ文化に関する教育が行われている。しかし，先住民族という観点からの教育は，海外で見られるような先住民族教育やアイヌ・スタディーズと呼ばれるような専門の学問や研究分野がまだみられない。本稿は，これからのアイヌの人々の教育を先住民族という立場から考えるために2023年11月に実施したオンライン・シンポジウムからの報告である。その内容は，１）アオテアロア/ニュージーランドのオークランド大学の教育者２名がマオリの人々の教育事例を紹介し，２）北海道内の３つの地域のアイヌのパネリスト３名によるそれぞれの「場」での教育の現状とその課題についての発表と，３）参加者５名によるアイヌの人々のこれからの教育についての「対話」を紹介する。最後に，４）マオリ研究の専門家による日本の先住民族の教育への展望についての言及を示す。

【キーワード】先住民族教育，先住民族の包摂，先住民族化，マオリ，アイヌ民族

１．はじめに

日本の先住民族であるアイヌ民族の人々への教育は，現在，日本の公教育が行われ，アイヌ民族に対する個別の教育は，1997年からアイヌ政策の下でアイヌ語とアイヌ文化に関する教育が行われている。しかし，先住民族という観点からの教育は，海外で見られるような先住民族教育やアイヌ・スタディーズと呼ばれるような学問や研究分野が未だにみられない。また，アイヌ民族に関する教育や研究は，国立アイヌ民族博物館・ウポポイ（民族共生象徴空間）の開館という歴史的に大きな転換点を迎え，様々な分野や機関での関連事業が進み，その教育方法も多様化している。このような状況の中で，現在のアイヌの人々には二つの中心的な自己認識が生まれている。1997年に「アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及，及び啓発に関する法律（アイヌ文化振興法：2019年に廃止）」が制定され，アイヌ語とアイヌ文化の復興と普及のための教育と実践を通して，アイヌの人々が「自分はアイヌである」という自己認識を持つことが公の中で可能になった[1][2]。また，2008年の「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議」が衆参両院で採択されたことで，「アイヌ民族は日本の先住民族である」という新しい自己認識がアイヌの人々の中に生まれ，先住民族としての自己尊厳につながって

* 北海道大学大学院教育学研究院 生涯学習論講座　専門研究員

DOI：10.14943/b.edu.144.65

いる[3]。その後，2019年５月に「アイヌの人々の誇りが尊重される社会を実現するための施策の推進に関する法律（アイヌ施策法）」が施行され，「アイヌの人々が民族としての誇りを持って生活し，その誇りが尊重される社会の実現と相互理解と尊重のある共生社会の実現を目指すための施策」が取られることになったが，この法律や施策の中でアイヌ民族に関する先住民族としての教育については，触れられていない。

このような経緯の中で，現在のアイヌの人々の自己認識には，「自分はアイヌ民族である」という認識と「アイヌ民族は日本の先住民族である」，という２つの認識[4]が共存し，ともにアイヌとしての誇りと尊厳につながっている。しかし，アイヌ民族と日本社会の双方に「先住民族」に関する共通した認識や定義が未だに存在せず，「先住民族」に関する教育分野も見られないことから，これからのアイヌの人々の新しい教育を先住民族の立場から考える必要性を感じ，2023年11月にオンライン・シンポジウムを実施した。

本シンポジウムでは，先住民族教育において先駆的な教育が行われているアオテアロア/ニュージーランドのマオリの人々の教育事例をオークランド大学のテ・カウェハウ・ホスキンズ氏（マオリ副学長代理）とアリソン・ジョーンズ氏（教育＆ソーシャルワーク学部，Te Puna Wananga教授）の２名から，教育現場での「先住民族の包摂」と「先住民族化」という二つのアプローチの間で揺れ動きながらも発展を続けている教育についての講演があった。また，北海道内の３つの地域（帯広，札幌，白老）から，酒井奈々子氏（帯広カムイトウウポポ保存会会長），岡田勇樹氏（一社：札幌大学ウレシパクラブ理事），山丸賢雄氏（公財：アイヌ民族文化財団ウポポイ運営本部主事）の３名のアイヌのパネリストが参加し，それぞれが活動する「場」での教育の現状と課題についての発表があった。その後，パネリスト５名によるアイヌの人々のこれからの教育についての「対話」が行われ，最後に，先住民族マオリの研究の第一人者である深山直子氏（東京都立大学人文社会学部准教授）から，今後の先住民族の教育への展望について，マオリとアイヌの両事例を通しての総括と言及が行われた。

２．「先住民族の包摂」と「先住民族化」の間での「対話」

このセクションでは，オークランド大学のジョーンズ氏とホスキンズ氏が，非先住民と先住民という教育者の立場から，ニュージーランドの教育と大学における先住民族・マオリに関する「先住民族の包摂」と「先住民族化」という２つのテーマについて，両氏の「対話」で相互に発表が行われた。その内容の日本語訳を編集したものを次に紹介する。英語文については，紙面の都合上ここでは省略する。また，発表時におけるフィラーなどの言葉は文章上で必要のないものを省略し，本稿中で使用する発表者の名前は，英語名の“Alison”（Jones氏）と“Te Kawehau”（Hoskins氏）という英語表記を使用する。

〈プロフィール〉

アリソン・ジョーンズ（Alison Jones, Ph.D.） Pākehā（パケハ：ヨーロッパ人の家系を持つ人のマオリ語）であり，教育研究者及び，Waipapa Taumata Rau/オークランド大学Te Puna Wānanga/マオリ・先住民族教育学部の教授。マオリとPākehāの関係についての書籍で受賞歴を持ち，ニュージーランドの教育におけるマオリと入植者の関係の分野で執筆を続け，教鞭をとっている。

テ・カウェハウ・ホスキンズ（Te Kawehau Hoskins, Ph.D.）　アオテアロア北島のWhangārei地区北部にあるWhakaparaのNgāti Hauzoに属し，Waipapa Taumata Rau/オークランド大学の准教授でありIhonukuマオリ副学長代理。大学における「先住民族化」についての対話を主導し，質的社会・教育研究，先住民－入植者関係の政治と倫理，カウパパ・マオリ教育の専門家である。



Dr. Alison Jones（左），Dr. Te Kawehau Hoskins（右）

Te Kawehau：Kia ora mai tātou katoa. E mihi nui ana ki a tātou kua hui nei i runga i te kaupapa nui whakahirahira o te rā. Tēnā rawa atu koe e Nanako i to pōwhiri mai ki a māua ko Alison. Tēnā rawa atu koutou kua hui nei, ngā mihi nūnui ki a koutou mai i Aotearoa nei, mai i ngā maunga, ngā moana, ngā marae, ngā hapū, ngā tangata katoa o Aotearoa, nei rā te mihi ki a koutou. Heoi anō, huri noa ki tēnei whare, tēnā tatou katoa.
Kia ora，皆さま，こんにちは。私の名前はTe Kawehau Hoskinsです。今，マオリ語でお話しましたのは，「今日，私たちをこの場に招待していただいたNanakoさん，Alisonさんと私を紹介していただきまして，ありがとうございます。今，参加している皆さまに，私たちとってアオテアロアでとても大切にしている様々な山，川，その本体の水から，また私自身の土地，アオテアロアの北島のWhangārei地区北部にあるWhakaparaのNgāti Hauzoの人々とともにご挨拶」をさせていただきました。Kia ora。

Alison：Kia ora tātou. Ka nui te mihi ki a koutou kua huihui mai nei i tēnei rā.
皆さま，こんにちは。はじめまして，私はAlison Jonesです。今，「皆さまへのご挨拶とここに来れたことを嬉しく思います」というご挨拶をマオリ語でさせていただきました。皆さまがプログラムでご覧になったように，私はパケハと呼ばれるヨーロッパ人の子孫です。私の両親はイギリスからの移民者で，私はアオテアロア/ニュージーランドで生まれました。私の仕事は，先住民族の同僚と共に歩む研究者であり，Te Kawehauさんとは今日のテーマについてよく議論をしています。ここに来られましたことにとても感謝をしているのと同時に，今日の午後から行なわれる対話をとても楽しみにしています。

〈ニュージーランドの教育の歴史：「先住民族の包摂」〉

はじめに，私の画面を共有させていただこうと思います。皆さまにいくつかの写真をお見せして少し私たちの会話を楽しんでいただければと思います。

皆さん，見えますでしょうか？今日，これから私たちは，「先住民族化」（indigenisation）と「先住民族の包摂」（indigenous inclusion）についてのお話をさせていただこうと思います。そして，「何が含まれなければならないのか？」，「何を「先住民族化」しなければならないのか？」，「私たちは，なぜ今日のような状況にあるのか？」という，これらの質問についてTe Kawehauさんと私は，アオテアロア/ニュージーランドのマオリの人々の状況を先住民族教育との関連で話を始めようと思います。

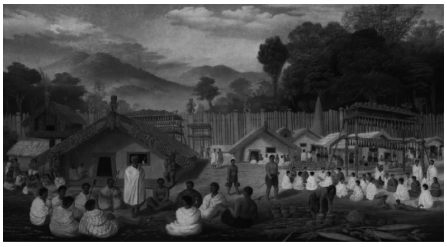


写真１

これからの話は，伝統的な教育，伝統的な先住民教育について話すのではなく，私たちは，西洋の学校教育について話をする，ということを最初にはっきりさせておかなければなりません。なぜならば，マオリの人々は，昔もそして今も西洋の教育システム（写真１）とは異なる口承伝承をベースにした教育システムを持っています。私たちは，それについての話ではなく，ニュージーランドの最初の西洋人学校について手短に説明をしようと思います。

この小さな奇妙な絵（写真２）を紹介します。これは，マオリの人々がオーストラリアを訪れた後，実際にニュージーランドにやってきた頃にニュージーランドで初めて建てられた学校の校舎を描いたものです。1800年代初頭，マオリのチーフがオーストラリアを訪問し，ヨーロッパ人の学校の教師に，このチーフが住んでいた地域の子どもたちに読み書きを教える教師を派遣してもらえないかと頼んだ，というものです。1814年以前は，ニュージーランドには船を離れた捕鯨者や船乗りは別として，ヨーロッパ人やパケハの入植者はいませんでした。



写真２

（WiFi接続一時中断後）

Alison：皆さま，お帰りなさい。スクリーンを見ていらっしゃいますでしょうか？この写真３について，ちょっとお話させていただきます。最初のニュージーランドで土地を得るために争いが終わった後に，植民地化が始まりました。そして，移住者がきましたが，その時にマオリの人々はこの土地についての条約を結び，マオリの子ども達の教育を行うことになりました。

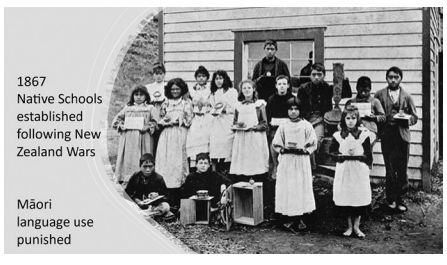


写真３

Te Kawehau：皆さま，こんにちは。こちらの写真３で見ていただけますように，1867年に，ここで移住者たちの政府が，「Village Day School」という教育システムを設立しました。この

システムは，村が作る学校でマオリの子ども達の学校でしたが，この写真でわかるように，ヨーロッパの移民の子ども達とマオリの子ども達が一緒に学ぶという学校でした。マオリの子ども達のために設立された学校だったのですが，ここで同化プロセスが進んでいきました。別な言い方をしますと，マオリの子ども達をヨーロッパの生活のやり方に含んでいく，つまりヨーロッパの考え方で考えさせる，存在そのものを考えさせる，物事のやり方もすべてヨーロッパの人々のように行わせる，というこれらのことを英語で行っていきました。英語は，学校での必修言語になり，マオリ語は学校で使うことが許されませんでした。このようなことが学校で行われることで，マオリの人々はすべて辺境に押しやられてしまい，ニュージーランドの社会の中で端に追いやられてしまいました。



写真４

Alison：1970年代頃までには，多くのマオリのコミュニティの人々は，彼らがいた郊外から都市部の中心に居住することを強制されました。これは主流社会の中に仕事があるから，仕事が得られるから，ということもありましたので，街の中心部にマオリの人々が移動してきました。1970年代に入りますと，このような学校は，マオリの子ども達のためのものということが終わり，全てのマオリの子どもたちは，主流派の学校制度の中にある正規の学校に入ることが義務づけられました。

写真４で見ていただいているのは，1970年代の平均的な女子の学校で，このようになっていました。マオリの子どもたちが数名この中にいて，パケハというヨーロッパ系の学生と一緒に学んでいました。もちろん，この時に学校で使われていた言語は，すべて英語になります。ですので，この時期というのは，非常に厳しい形でマオリ語が失われていく時代で，マオリのコミュニティやマオリ文化が失われていきました。Te Kawehauさん，1980年代に入ってからの話をお願いしてもいいですか？

〈マオリの言語と文化復興〉

Te Kawehau：はい，どうもありがとうございます。1980年代に入りますと，この時期というのは，ニュージーランド全体のマオリのコミュニティが，ちょうど文化復興の活動が始まり活性化してくる時期でした。



写真５

1970年代後半には，マオリのコミュニティの人々は，すでにその活動の中で，失われそうになっている自分達の言語をもう一度見直す機会を得ていました。その頃は，政府の圧力が教育に対してかかっていましたが，そこから再度自分達のマオリ語，マオリ文化，学校というものを見直す時期に入りました。（写真５）そして，「何かが起こる」ということをただ待ってるわけではなくて，自分達でムーブメントをおこしていたのが，ちょうど1980年代の初めの頃でした。

それで，皆さま，この子どもたちのＴシャツに「コハンガ・レオ」（写真５）と書いてある

のがわかると思いますが，この言葉の意味は「言語の巣」という意味です。ここでの考え方は，マオリのコミュニティの人々が政府からの支援や資金を得ることなく，自分達でこの「言語の巣」を作っていこうと活動を始めた時期でもありました。マオリ語を話せる長老や年齢が上の人々，赤ちゃんや子どもたち，そして若者の「家」としての文化のセンターとなる「言語の巣」というものを設立しました。それは非常に重要な活動となり，分水嶺とも言えるような時期でもあり，マオリの言語，マオリの復興と再生の時期でした。



写真 6

Alison：また，こちらの写真 6 ですが，先ほど「言語の巣」が子ども達に導入された話をしましたけれども，学校のシステムも改革され始めました。子どもたちから若者に向けて，いろいろな年代への教育が平行して提供されるようになっていきました。マオリ語をマオリの教育方法で教え，マオリ文化が学校の土台になり，学校を通じてマオリ文化を再活性化していきました。1990年代に入り，マオリの高等教育機関が始まり，３つの大学に相当する，「Whare Wānanga」という機関が設立されました。マオリの人々が運営し，マオリ語をマオリの教育方法で教え，英語も教えています。

Te Kawehau：おそらくここで申し上げておいた方がいいかと思いますが，ここでのマオリの学生の割合は少なかったのです。ほとんどのマオリの学生は，いわゆる主流社会の学校に行き，英語のメディアに触れていた時期でもありましたので，学校のスクーリングもほとんど英語で行われた時期にこのような高等教育機関ができたとも言えます。

〈大学教育とマオリ〉

Alison：今日の話ですが，背景として皆さまにお伝えしたいのは，ニュージーランドの人口統計です。ヨーロッパ系のパケハといわれる人々が，およそ70％になります。そしてマオリが16.5％，アジア系，自分達をアジア系であると称する人々が，およそ人口の15％ぐらいを占めている，ということになります。しかし，オークランド大学の学生の割合を見ますと，私たちが仕事をしている大学ですが，学生の割合はこの人口統計の割合が反映されていません。32％がヨーロッパ系の学生，そしてわずか７％がマオリの学生で，そしてアジア系の学生がおよそ47％ということです。（写真７）

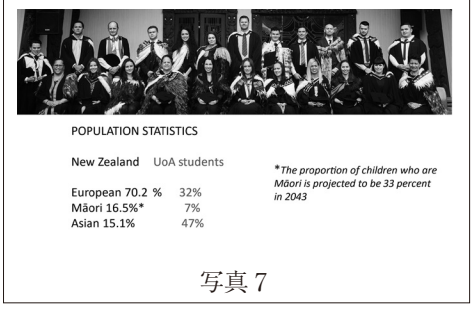


写真 7

ここで私たちはいつも疑問に思うのは，「なぜ多くのマオリの人々がこの大学に来ていないのか？」ということです。そして，オークランド大学の学校の達成度の統計を見ますと，マオリの人々は，おそらく，例えば試験ですが，そういったことに関して，マオリの人々が行っていることが，なかなか試験の点数を取ることにつながらないのかもしれない，ということがあ

ると思います。

しかし，2043年になりますとマオリの子ども達の人口というのは，およそ33%まで増えるのではないか，また学校での割合もそれだけ増えるのではないかと考えられています。マオリの人々というのは，ヨーロッパ系の人に比べて，子どもの数，子どもの割合が多いので，将来に向けて子どもの数が増えて，大学のマオリの学生も増えていくのではないかと考えています。

そして，アオテアロア/ニュージーランドにいるマオリの子どもたちというのは，特に教育の中で難しい状況に直面しているところがあると思います。（写真８）「なぜマオリの子どもたちの教育がうまくいかないのか」，「なぜマオリの人々の住宅や健康問題，受刑者などの問題がうまくいかないのか」ということについて，過去の社会統計を見ますとアオテアロア/ニュージーランドのマオリの人々は，他の人口統計の人々よりうまくいっていない結果が示されていました。



写真８

これらについて，私たちは少なくても異なる五つの観点を取り上げて，この問題に答えるという形で皆さまにお伝えできればと思っています。こちらのこのあたりに注目してさせていただきたいのですが（写真８中央：individual faultsを指して），1980年代から90年代にかけて，多くの人々は「マオリの家族には個人的な問題があるのではないか」，というふうに指摘していました。例えば，マオリの家族，両親とか，コミュニティがうまく機能していなかった，という指摘があります。また，健康に問題があったり，薬物やアルコール中毒の問題があったり，もしくは財政の問題です。それから父親が不在だったり，10代の両親がいるという個人的なマオリの家族の問題があった，というのが理由として挙げられていました。またそれ以外にも議論に上がっていたことですが，私たちはそれらが個人だけの問題ではなくて，社会的な形式・パターンの問題だと考える必要があります。マオリのコミュニティがうまくいっていないということは，比較統計をみるとわかるのですが，「どのようにマオリのコミュニティは無視されているのか」，ということが1980年代前半の主流社会での課題でした。

また他の議論の観点としては，1990年代に入り，また現在でもそうですが，個人やコミュニティが機能していないというだけの問題だけではなく，社会の構造にも問題があるということが指摘され始めました。そして，「どのように社会が構造化されると，不平等がその構造に織り込まれるのか」ということ。また，私たちは公平性について，言い換えるなら，異なるコミュニティで異なる方法によって生み出された業績や良い成果に対する公平性について，また多様性の重要性や「包摂」（inclusion）について話し合いを始めました。

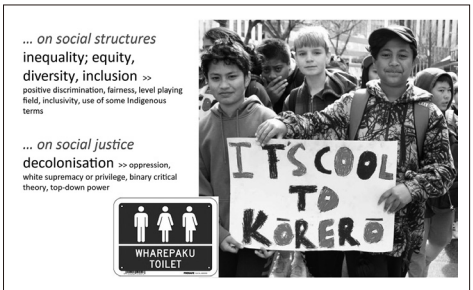


写真９

この場合の「包摂」とは，「私たちは，差別，区別，排除を生み出さないようにするために，先住民族を主流社会の中に取り込む必要がある」，ということです。人々は積極的差別（positive discrimination）や積極的格差是正措置（affirmative action），公平性について話し合い，また同等に対等に扱われる公平な場，誰もが参加できる場についても話し合われました。また，

ニュージーランドの主流社会の中で，マオリの言語を使うことが増えていきましたが，それはマオリの人々や文化を主流社会の中に「包摂」するためでした。同時に，その中には様々な議論がありました。「私たちは政治にフォーカスしなければならない」と言う人もいます。また，「このような状況の中でマオリがどのように人種差別主義者によって犠牲になっているのか」，「マオリのコミュニティが白人至上主義，白人優越主義により抑圧されている」ということについて，様々な場面で議論がありました。トップダウンの権力を持つヨーロッパによる植民地化のプロセスの中で，このような様々なことが不正義と結びつきながら行われていきました。これが植民地化の影響を削減するために，アオテアロア/ニュージーランドで脱植民化をしなければならない，ということと結びつき，話し合いが行われてきたわけです。そして，「次に向けて変化する，シフトして行く」というマオリの状況が，学者や一般の人々により話し合われてきました。また，最近では非常に興味深いアプローチが行われるようになり，これが「先住民族化」に焦点を当てる，ということです。今日の発表の時間は短いですので，この点について私たちがお伝えしたいことを端的にまとめてお話させていただきます。

〈マオリと「先住民族化」との関係〉

Alison：この「変化・シフト」とは，先住民の人々が主流社会で今までは除外されて不利益を被っていたので，主流社会の中に「包摂」するという方法から，「異なる新しいアプローチでマオリ自身がやっていく」という方法への移行です。主流社会側が，「私たちがあなた達マオリを社会の中に「包摂」する」，というのではなく，「マオリ自身がマオリの立場から行う」ことであり，マオリの人々が「マオリの権威，マオリの力，自分達の意思で自己決定をする」ということです。



写真10

そして，このようなことを話していく場合に，もっとはっきりと示さなければならないのは，こちらの表（表１）で見ていただけると思いますが，Te Kawehauさんも話していましたが，このような７つの「先住民族化」のポイントがあります。この内容について，できるだけ詳しく話していきたいと思います。これらの点についてスクリーンでご覧いただけると思いますが，これから話していきたいと思います。

Te Kawehau：Alisonさん，ありがとうございます。まず，この表について話す前にお話しておきたいのは，マオリがニュージーランドの人口の17％であり，社会的成功はまだ相対的に低い状態で，公平性ということに関してはまだ達成されていない，ということです。マオリの人々がこれから活性化していく中で様々なことに関わっていくことを考えますと，私たちは現実のこともみながらやっていかなければなりませんし，現在のニュージーランド全体を見た時に，この表（表１）をみながら現実のことも考えてやっていかなければなりません。また，マオリの人達が社会的，政治的にも生活のあらゆる分野に積極的に関わっていく必要があります。このことは素晴らしいことだと思います。そして，社会的，文化的，構造的にも足を踏み入れて復活をしており，健康や教育など，あらゆるところに大きな変化をもたらそうとしています。

Alisonさんが先ほど言われたように，オークランド大学の学生数ですが，大きな機関の中の

７％はマオリの学生で，この数字で私たちは大きなインパクトを与えることができると思います。大学で生徒の数により大きな影響を与えることができるという状況になっています。

それでは，話を元に戻しますが，いくつかのお話をしていきましょう。この「先住民族化」ということをお伝えしましたが，これはまた，脱植民地化ということです。これはシフト，つまり変化，移行ということを意味し，私たちは1840年のワイタンギ条約についてまだ話をしていませんが，この約束を果たすために，どのように私たちの制度，あるいは組織というものが変化をしなければならないのか，ということを考えていかなければなりません。この条約は，マオリとの関係性を約束する上でマオリの部族のリーダーたちに英国の王族が約束したものですが，それは，マオリと非マオリの人々との関係性を示し，平等に扱うという約束でした。このことは，マオリの人々にとって重要な点であり続けています。

〈教育における「先住民族化」のプロセス〉

Te Kawehau：私たちが「包摂」について批判的に見ますと，この「包摂」の考え方では学校の基本が，まだヨーロッパ的であり西洋的なままになっていることです。その中で「マオリの学生をもっと大学に入れるにはどのようにしたらいいのか？」あるいは，「どのようにすれば私たちは彼らがより成功する確証を持てるのか？」そして「どのようにすれば，マオリの子どもたちが学校でより成功をするようになるのか？」ということを，さらにより良い結果が得られように私たちは試しながら続けています。

けれども，私たちは特に制度そのものを変えたいとは思っていません。本当に変えたいことは，子どもたちや地域のコミュニティなのです。そして，もし必要であれば，マオリの言語や文化をより良くするために「包摂」を考え，見ていかなければなりません。私たちは「包摂」に対して批判的になることもありますが，一方で「包摂」は大きな進歩を遂げ，私たちに大きな利益をもたらしたのです。例えば，ニュージーランドのすべての小学校では，マオリの言語と文化を教えることが義務付けられています。このように小さな貢献が何もないわけではありませんし，「先住民族化」のプロセスの一部として考えることもできます。「先住民族化」が完全な答えなのかどうかはわかりませんが，しかし「先住民族化」がもたらすことは，皆さんがここで見てきたように，「マオリの成果を向上させるためにマオリをどのように取り込むか」ということだけではなく，「マオリの人々がより良い成果を上げられる方法を考え，彼らを励まして大学に来るようにする方法を考えてきた」ことです。そして，これからをマオリが活性化しようとしている中で，様々なものに関わっていくということを考え，現在のニュージーラ

表1 「先住民族の包摂」と「先住民族化/脱植民地化」の対比1（Hoskins, Jones 2022[5]から講演者による抜粋）

Indigenous inclusion	Indigenisation / decolonisation
Words such as retention, access, achievement, recruitment, equity, diversity and inclusion are central to conversations about Indigenous people	Indigenous language leads the discourse (*whanaungatanga* and *manaakitanga*)
Tends to be deficit thinking – Indigenous people often lack necessary skills; they need these skills to be successful	Tends to be strengths thinking – Indigenous students bring knowledges and interests to all settings; identify and build on those strengths and interests
Organisation tends to remain the same, and Indigenous people are asked to adapt (achieve, remain, enter, be included, etc)	Organisation changes to be 'more Indigenous'. (Not dumbing down, but smartening up)

ンド全体を見わたした時に，こちらのこと（表１）を考えていかなければなりません。

この表１を見ますと，どのようなことをするのかといいますと，「現実のことも考えながら実行する必要がある」ということです。マオリの人々が，社会的，そして政治的にもニュージーランドの中で関わっていく必要があります。そのように関わることは素晴らしいことだと思いますし，文化的にも社会的にも，そして構造的にも，様々な面がありますけれども，今，大きな復活をしており，それがまた大きな違いを生み出しています。そして「先住民族化」を考える場合に，制度の中の土台の部分にマオリの人々の考え方，組織の作り方，マオリの文化，マオリの価値，マオリの知識が基礎になることです。それはどのように多くの人々に扉を開けるのかということだけではなく，もっとずっとその先にあるものです。Alisonさん，このスライドからいくつか話をしていただけますか？

Alison：素晴らしい説明だったと思います。私はこの表１を用いて，「包摂」と「先住民族化」の違いについて，「包摂」ということがどのようなことなのか，「先住民族化」とはどういうことなのか，ということについて，またそれらの考えが変化してきていることを説明しようと思います。そして，この中で考えていかなくてはならないことは，その二元性です。先住民族の人々を「包摂」していくプロセスと「先住民族化」を進めていくということ，この表１ではその両方を表記しています。しかし，大学の中でそれらを進めていくということになった場合には，話し合っていかなくてはなりません。そして考えるべき事は，博物館のことや，健康ですね，健康に対するシステムなど，そういった制度の中でも比較的シンプルな考え方で社会を変えていくということです。マオリの文化やマオリの言語，知識，そういったものが，単に小さな部分を変えていくだけではなくて，社会全体を変えていくことをリードしていく，というように考えています。

と言いますのも，表２で示していますが，私たちがその「包摂」という考え方をした時に，社会や組織の中では，例えば，マオリの人々をコンサルタントであったり，評価をする者，主流社会のアシスタントなどとして迎える傾向があります。「包摂」の場合には，主流社会の組織として先住民族の人々に「手伝ってもらう」というような立場をとり，そういった形で社会に含めて行くことになります。そして，そういう評価をする担当者などは，低賃金で働いたり，低い立場での職務を得ることになります。また，マオリの人々は「相談を受ける」わけですけれども，そのタイミングは，プロジェクトの計画の後半に行われ，様々な組織，様々なレベルのプロジェクトやアイデアなどを管理するリーダーや専門家として見られるのではなく，マオ

表２ 「先住民族の包摂」と「先住民族化/脱植民地化」の対比２（Hoskins, Jones 2022[5]から講演者による抜粋）

Indigenous people as consultants & reviewers & assistants for settler understanding / lower paid & lower status work. Are consulted, often at the later stages of planning, for their 'perspective'.	Indigenous people as the leaders, and experts. Indigenous expertise normalised, recognised & rewarded at all levels of the organisation
Requires settler peoples to 'know about' Indigenous peoples in order to include them; requires Indigenous teaching of others.	Requires others to accept 'not-knowing' sometimes; requires them to listen & be alert to Indigenous thinking without demanding to be taught. Non-Indigenous have a level of comfort with discomfort and remain permanently, positively, engaged.

リの観点からの「見解」を求められるのです。

これに対比しまして,「先住民族化」している社会というのは, 先住民族を, 例えば, リーダーとして迎えたり, コントロールする権限を持ったり, 専門家として迎えるわけです。彼らの知識が中心になっていて, 組織のあらゆる階層で相応しい扱いを受けることになります。また, 大変になりますけれども, 社会的「包摂」の方では, こういった植民者の人々, 私も含めてですけれども, いわゆるニュージーランドの西洋系の人々というのは, おそらく日本で言うところのアイヌの人々に対する日本人という人々に相当しますが, そういった立場の人々を「包摂」するためには, 理解することが求められます。その「包摂」の社会では, 先住民族の人々の生活を理解することを求めていくのが「包摂」ということですが, しかし, それは先住民の人々にとっては, とても疲れるわけです。というのは, 植民者側の人達に「彼らが求めるものを教える」ということになるからです。「先住民族化する社会」というのは, まず誰かが中心というわけではなく, お互いすべてを知っているわけではないし,「先住民族の人々について知らないこともある」ということをまず受け入れます。そして,「先住民族の考え方を同じ立場で聞く」,“教えてください”ということを強要するのではなく, また“理解しなければならない”ということでもなく,「お互いに立ち止まって聞く」, そういう社会をつくるのが「先住民族化」ということになると思います。

ニュージーランドでは, あなたたちのような主流社会の中心の人々, パケハや植民地側の人々というのが, 例えば,「横に立って見つめる」というのではなくて,「共に見つめていこう」という姿勢, そして非先住民の人々のことをすべて学ぶということではなくて,「わからないという状態」,「不快な状態」というのをそのまま受け入れるということだと思います。また, マオリの人々が怒りを示すこともあります。自分達の思い, ストレスというものを公の場で強い形でパケハの人々に向けることもあるわけです。そして, パケハの人はその怒りで傷つき, マオリの怒りというような言葉で言われていますが, そういった状況下になったとしても, それに対してしっかりと向き合っていくということ, 積極的に関わり続けていくという態度を許容するのが,「先住民族化している社会」ということになります。それでは最後に, こちらの対比（表３）に関してTe Kawehauさんにお任せしたいと思います。

Te Kawehau：今, Alisonさんがおっしゃったことにちょっと追加をしたいと思います。ヨーロッパ系の人々, いわゆる植民地側の人々がいつもマオリの人々のことを「知りたい」と思う, そういった状況というのは, いわゆる植民側の姿勢なわけで,「あなたが考えていることを言ってください」,「どのように感じているかを言ってください」と言ってくるのですが, これは「彼

表３ 「先住民族の包摂」と「先住民族化/脱植民地化」の対比３（Hoskins, Jones 2022[5]から講演者による抜粋）

Primarily benefits non-Indigenous who … know more, feel better about themselves, can report they are including others, meet diversity targets	Benefits ALL because … the thinking behind *whanaungatanga* and *manaakitanga* is about people and relationships and healthy environments for all
Focus on ‘what’; outcome / product oriented / outcomes and solutions	Focus on ‘how’; process-oriented = ‘journey’

らがどう思ってるのか」ということが中心にある社会ということになります。ヨーロッパ系の人々は，かつて起こしてしまったことを，また自分達のアイデンティティを見つめなおすために，先住民族の話を聞く，ということが昔はあったわけです。それは，権力であったり，社会のアイデンティティであったり，彼らの歴史を見つめ直すということのために，マオリの人々に対面していたということです。それが，かつては「包摂」するという社会でした。

Alison：はい，素晴らしい指摘です。

Te Kawehau：最後になりますが，この「包摂」の社会という考え方，そして「先住民族化」という双方の考え方の中で，“含めていく”という考え方というのは，例えば大学を例にとると，多くの大学をみると，「私たちはこれまでよりもマオリの学生をより受け入れています」，「資金的な提供をしています」とか，「マオリの人々に対して非常に親切に対応しています」，というような話を大学側から聞きました。このことは，いわゆる「成果としての公平性を見つめていく」，ということをしているわけです。しかし，この考え方が悪いというわけではないですし，良いところもあるのですが，私たちが考えている「先住民族化」を進めていく方法ですが，これはマオリのことだけを考えるというわけではなくて，すべての人々を見つめていくことにあります。

〈マオリの世界観・価値観〉

Te Kawehau：そして私たちは，ここで２つの言葉を皆さんにお届けしたいと思います。この考え方というのは，このスライドにはありませんが，“whanaungatanga”（関係性，親交，親戚関係）という言葉で，これは，マオリの価値観の話になりますが，「関係性が重要だと考える」ということで，「大切な関係を築いていくという態度で私たちの世界を見る」，ということになります。これは，学校，それから大学だけではなく，社会全体の関係性を重要視する，そういった考え方です。そして，それがすべての人々に向けて行われるのが，「先住民族化している社会」で，マオリの輪を広げていくという考え方です。

もう一つは，“manaakitanga”（ホスピタリティ，親切）というのは，「何をしてお互いを思いやるのか，寛容であるのか，どのようにホストしているのか，そして受け入れていくのか，それを総合的に生み出していく」考え方になります。尊厳を持って他者に接するということ，この考え方は，先ほどの繰り返しになりますが，マオリのことだけではなくて，すべての人々に向けた考え方になります。それが，組織，社会全体をカバーしてくれる考え方になります。

そして表３の最後の比較の部分ですけれども，この「社会的「包摂」の考え方」はまず「成果を中心に考えていく」ということで，「結果や解決の方向に向けていく」，ということになります。私たちは，それに関心がないとか，そういうことを言うのではなくて，まず改善はもちろん必要になるのですけれども，「先住民族化の社会」で重要だと考えることは，「プロセスを考える」ということです。それがどのように達成されるのか，何を達成するのかではなくて，「どのようにそのプロセスを通っていくのか」という質についての考え方になります。私たちは，お互いに関わっていかなければなりませんし，純粋な進展をしていくことを私たちは今，話し合っています。これが私たちの考えていることで，今日お話ししたかったことです。

Alison：そうですね，その通りだと思います。そしてこのスライド（写真11），最後のスライドになりますが，私たちが話していたことと関係しています。こちらの方に二つの写真があるのですけれども，とてもアオテアロア/ニュージーランドを象徴しているものです。これはノーマリティ，マオリ文化を通常なものとすることで，私たちにとってはすでに通常のこととなっているということです。



写真11

こちらの方（写真右）でご覧いただけるかと思いますが，今こちらの方でハカをしていますね。伝統的な舞踏です。そしてそこではチームの結束を呼び掛けて，まず試合を行う前に行っています。これは私たちの文化の中で，このようにニュージーランドで行うことは通常のことになっています。また，これはマオリのコロワイ（写真左）と呼ばれるものなんですけれども，アーダーン首相（前首相）が肩にかけているものです。このような中で，彼女はもらったものをこのように肩にかけて，他の女性と手を組んでいます。これは本当にリアルな関係性を示しているやり方だと思います。このコロワイをまとうことによって，彼女は自分達のアイデンティティを示していますし，またこの関係性を示しています。そして他の人々と，ここの周りに座ってる人々との関係性を表しています。

それでは，ここで私たちのお話を終わりにして，様々な皆さま方の視点もお聞きしたいと思います。そして，私たちの方の視点も皆さま方に有効であればと思っております。皆さま方は，また全く違った状況にあると思いますし，また，似たところもあるかと思います。日本においても，私たちと同じような状況もあると思います。私たちの身近な紹介を，また私たちの考えについて，私がこれまで話し合ってきたこと，ニュージーランドで行ってきたことをお話しさせていただきました。ご静聴どうもありがとうございました。

3．先住民族アイヌの人々の「声」を聞くために

このセクションでは，北海道内の三つの地域から，酒井奈々子氏（帯広），岡田勇樹氏（札幌），山丸賢雄氏（白老）の３人のアイヌのパネリストによるそれぞれのライフストーリーと個々の地域/場における教育の現状と課題についての「声」（ストーリー）を紹介する。発表者の文は，前のセクションと同様に口頭発表時の文言を土台にしているが，フィラーなどの言葉などは内容に支障のない限り省略し，発表時のスライド，写真の掲載は省略していることを予めお伝えしておく。

(1) 酒井奈々子　帯広カムイトウウポポ保存会会長（帯広）

帯広カムイトウウポポ保存会会長，酒井奈々子です。どうぞよろしくお願いいたします。私は北海道の帯広市出身で，1951年生まれです。私の生まれた場所は，帯広の伏古コタンという場所で，この地図の赤い丸の所です。奈々子，５歳になりました（スライドを指して）。皆さん知らないかもしれませんが，私にも小さい時がありました。踊りは３・４歳の時に母や祖母

たちと一緒に踊っている記憶があります。家の中のみんなと一緒に炉を囲んで話をしているうちに，踊りが自然に始まるという感じでした。踊りを今のように「学ぶ」というより，「見て習う」という感じで見て覚えていました。小学校の２・３年生から大人と一緒にリムセ，踊りを踊っていました。

24歳の時，阿寒から帯広に移動し，生活館で踊りの練習をするようになりました。国内の様々な地域で踊ったり，行事やイベントで呼ばれたりして踊っていました。帯広カムイトウポポ保存会の創設者の加藤ナミエフチの写真です。私はこの時，44歳ですが，この時にナミエフチから，「お前はばあちゃんの後を継いで，ウポポ保存会の代表になって，保存会を引っ張っていくんだよ」ということを言われました。50代の時に会長になり，本気でウポポ（歌），リムセ（踊り）をする気になりました。この時に保存会の中で世代交代がありました。その後，本の表紙にもなりました。70代，2021年の時に，文化庁長官表彰を受け，また同じ年に帯広市教育文化功労賞を受けました。アイヌ民族が社会に認められ，表彰をいただくことになり，本当に嬉しく思い，ありがたいなと思っています。私たちの練習場所は，帯広柏林台生活館です。これは踊りの練習や活動風景です（写真を示して）。

今のアイヌの地域の問題ですが，一つは地域で育った若者が大学への進学や仕事で大都市や観光地に行ってしまうことで，地域のアイヌ文化の継承者がいなくなっているために地域の継承が弱くなっているように感じます。二つ目は，帯広の保存会での踊りの継承は，家族のような人間関係の中で昔，炉を囲んで祖母や母たちがやっていたように集まったみんなの顔を見て，「元気にしているか」，「困ったことはないか」などの話をして，交流をしながら練習をしていました。それは今のような観光の中で見せる踊りではなく，自分たちの楽しみのためにやっていた踊りの継承になっています。そのために，今の若者がするような練習と違っているかもしれないし，「自分たちのための踊り」という考え方と「見せるための踊り」という考え方の違いがあると思います。これらの問題をマオリの人たちは，どのように扱い，どのように乗り越えてきているのかを伺えたらと思っています。ご清聴どうもありがとうございました。イヤイライケレ，キア・オラ，サンキュー。

⑵ 岡田勇樹　（一社）札幌大学ウレシパクラブ 理事（札幌）

岡田勇樹と申します。札幌大学で働いていますが，業務の一環としてウレシパクラブという団体をサポートしています。一度大学を卒業して社会に出てから，ウレシパ奨学制度というものができたタイミングで，アイヌ文化を学ぶために，もう一度ウレシパ奨学生として大学に入りました。札幌大学を卒業後，札幌大学の大学院に進んだ後に就職も札幌大学ということで，今も働いています。

私はアイヌ民族なんですが，一度大学を出ているにも関わらず，再度大学に入ったのはアイヌ文化を学ぶためなんですが，アイヌ民族でありながら，アイヌ民族というものに対して肯定的に考えることができていなかったからなんです。学校でアイヌ民族について学ぶ情報というのは少なくて，まあ，ネガティブなものが多かったんですね。それで，アイヌ民族っていうのは，その日本のそのマジョリティに対して劣った民族なんだ，というふうに思っていました。それを肯定するチャンスなんだなというふうに考えました。札幌大学に進学して学んで，結果から言って，その選択は正解だったと思います。文化には優劣がないという，言ってしまうと当たり前のことなんですが，そういうところに気付けたということです。アイヌ民族は劣った

民族なんだというネガティブなイメージを持っていたのは，知識が足りなかったからだ，ということに思い至りました。当時の学校教育は，先住民族とかアイヌ民族についての正しい知識というのが足りないふうに感じましたし，場合によっては間違っている情報なんかも伝えられたっていうことがありました。

当事者が教育の現場にいませんし，結局，マジョリティの側からすると，先ほどのお二人のお話にもありましたが，マジョリティ側の努力ということを考えた時に，日本ではアイヌ民族についても本当に面倒くさいっていうふうに言われることが多かったわけですね。ですから，それも無理もないことなんだなあというふうには思っていました。まあ，結果的に，その見えないことにしたり，知らないことにしたり，アイヌ民族は存在しない，いないんだ，といういうふうにしちゃった方が楽，というようなことがありました。

あのウレシパクラブというですね，札幌大学にある団体なんですが，これはアイヌ民族と和人，アイヌ民族ではない学生たちが一緒にアイヌ文化を学ぶことを通して「育て合う」ということをやっている団体で，企業や一般市民の方も会員になって支えていただいている団体なんですが，活動の母体はあくまで学生ということになっています。最近は，漫画「ゴールデンカムイ」というその漫画の影響でアイヌ文化に興味を持つ学生がすごく若者を中心に増えていて，ウレシパクラブにそういった若者たちが入ってくるんですが，その反面，アイヌ民族の学生はなかなか多く入ってきているわけではありません。そのウレシパクラブに入って活動するっていうことは，アイヌ民族であるという，そのアイデンティティを明らかにした上で，札幌大学で，ウレシパクラブで学ぶということですから，あの進学する側としてはよく考えると思います。

アイヌ文化を学ぶということだけであれば，他の選択肢もあるでしょうし，アイヌ文化を大学で学ぼうと考えないアイヌ民族の若者もいるかも知れない。アイヌ民族の若者に対するアピールが足りてない部分が，もしかしたらあるのかも知れないというふうに感じています。大学としては，もっとウレシパクラブ，札幌大学で学びたいと思われるような，魅力も作り出していかなければいけないというふうにも感じていますが。限られた人員で，多くの業務をこなさなければいけないので，ウレシパクラブの学生たちが20人から30人くらいいるものですから，なかなかカバーしきれない，マンパワーが足りないような感じになることが増えていくような気がします。

最初から14年くらい経ってますけれども，まあ，そのウレシパクラブに対する認知度が上がっているようには，ちょっとなかなか感じられないというのが現状です。外に対してもそうなのですけれども，大学内でも，もっとアイヌ文化やウレシパクラブに対する「育て合っていく」，アイヌとそうでない学生が一緒に「育て合っている」，ということにもっと理解を広げていかなければいけないのですが，なかなかマンパワーの問題があって，苦しいところですが，できる限りで進めていこうと思っているところです。

スライドはあくまで背景なんで気にしないで頂ければと思うんですが，（私の）若い頃の画像です。お二人のお話を聞いて，アリソン先生とカウェハウ先生の，お話を聞く中で，大学教育の現場で，学生としては，「どのような姿勢でマオリについて学ぶのか？」，「教員としては，どのように学生に伝えるのか，教えるのか？」それについて教えて頂ければと思います。マオリやマオリの文化をよく思わない教員は，なかなか言いにくいところだと思いますが，いますでしょうか？もしいるんでしたら，それに対する対応なども合わせてお願いいたします。あと，大学に対してより積極的な関わり，積極的に関わるように協力を引き出すためのコツなんかが

あれば，それも教えていただければ，というふうに思っております。よろしくお願いいたします。

(3) 山丸賢雄　(公財)アイヌ民族文化財団 ウポポイ運営本部 主事（白老）

では，簡単ではございますが，私の経歴といいますか，お話をいたします。じゃあ本当に簡単でございますがアイヌ語でご挨拶致します。「イランカラㇷ゚テ クコロ コタン レイコロ カトゥ シラウォイ ネ ワ 山丸賢雄 アリ クレヘ アン」。「イランカラㇷ゚テ」，というのはアイヌ語のあいさつ言葉で，私の村の名前は白老，私の出身は白老で山丸賢雄と申します，と短い言葉ですがご挨拶させていただきました。どうぞよろしくお願いいたします。アイヌの挨拶は，最初に自分の村の名前を言って，村同士のことをお伝えしてから，まずは自分の出身お話させていただきました。簡単でございますが，私の経歴と言いますが，まあ，私が今何をしているのかについてお話致します。

私は，今言ったように，白老出身ということで，あの国立の施設，ウポポイがある町の出身でございます。アイヌ文化を始めて勉強したのは，ちょうど今から約十年ほど前，私が20歳の頃に第三期伝承者育成事業という事業に参加してから本格的にアイヌ文化を深く学ぶということになりました。こちらはですね。2008年，今から15年程前から始まった事業で，アイヌの若者を対象に三年間，総合的にアイヌ文化を学ぶカリキュラムとなっております。毎日，約300日近い日数，例えば，今日は工芸，次の日は舞踊っていうふうにですね，本当に総合的に学んでいくような，専門学校のようなカリキュラムを事業に参加することがきっかけでアイヌ文化を学ぶようになりました。で，その中で，特に興味を持ったのが言葉，アイヌ語言語で，自分は言語をですね，アイヌ語を話せるようになりたいということで，より深くアイヌ語について勉強することを決めました。

育成事業終了後には，今のウポポイの前身にあたるアイヌ民族博物館に就職致しまして，次の伝承者育成事業の引率係ということで，カリキュラムなどを作成して一緒に勉強するということでアシスタント・ティーチャーを務めるようになりました。ちょうどですね，ウポポイ・アイヌ民族共生象徴空間ができる直前という時期でもあったので，この私が就職した2017年に，このアイヌ民族博物館は一旦営業をやめて，札幌にあった財団（公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構）と合併した形で，新しく公益財団法人アイヌ民族文化財団と名称に変わりまして，引き続き私は，名前はわかりましたが，担い手・伝承者育成事業の引率係を務めます。正職員ではなかったので，正職員のですね，採用試験を一般の方と同じように受けて，採用されてからですね，翌年，2019年からウポポイの開業の準備業務に携わるようになりました。

現在は，ウポポイで働いておりますが，私は今地図が見えているかと思いますが，こちらはウポポイの全体図なんですが，ウポポイは大きくですね，３つの主要施設に分かれておりまして，大きなこの施設の中で見ますと，博物館と博物館以外の周辺施設ということで，博物館と公園という言い方をしております。で，私はこの公園，赤い枠で囲まれている中で仕事をしていて，博物館のメインの業務は少し違うんですけども，この公園側，赤枠の中での業務を行っております。では，具体的にどのような業務を行っているかといいますと，私はそこにおけるアイヌ語体験プログラムを実施するという業務のもと，今はウポポイの園内での体験プログラムの開発から実施を行っております。その他，先ほどの赤枠の中，公園側で行うプログラムなどのアイヌ語が間違っていないかどうかのチェックをさせていただいております。

また，ウポポイを発信する外と中のメディアですね，新聞やテレビ，後はラジオなど，様々

なメディアのアイヌ語の表記が間違っていないか，発音が間違っていないか，ということもチェックさせていただいております。また，職員のポンレの選定と書いておりますが，ウポポイではアイヌ語の普及活動の取り組みとして，実際にアイヌが名前を付けるときの由来に従って，アイヌ語のニックネームでお互いを呼び合っております。これはまあ，名前という身近なものからですね，職員も来園者もアイヌ語により親しみを持ってもらう，ということで，お互いをプログラムのために人前に立つ時とかにですね，ニックネーム，ポンレでお互いを呼び合うようにしております。そのポンレでですね，職員のポンレを考えることもしております。また，国立アイヌ民族博物館が行っております新表現（アイヌ語）の検討ワーキンググループに内部職員としても参加しております。既存にはない表現，新しい表現というものもアイヌ語で作っていこうということですね。展示の中の説明文ですとか，各施設の先ほどの地図にもあったアイヌ語も同じような，このワーキンググループで検討した施設の名前ということになっております。このような博物館が行っているアイヌ語の取り組みについても内部の職員として参加させていただいております。

プログラムは今どのように行っているかと言いますと，大きく２つのアイヌ語のプログラムがございます。どちらも初めて参加される，初めてアイヌ語に触れるような方向けの興味・関心のきっかけを与えるような，本当に簡単な内容のプログラムとなっております。一つは30分と長い時間ですが，ゲームをしながら単語を覚える，ということを目的とした体験プログラムです。これは，動物や民具などのアイヌ語を紹介しながら，紹介したアイヌ語でオリジナルのビンゴで遊びながらひとつでも動物の名前を覚えて，楽しいということからアイヌ語に興味・関心を持ってもらう，ということを目的としております。

もう一つは，15分という短い時間のものですが，こちらは逆にフレーズですね，日常でも気軽に言葉を使ってもらいたい，日本語の中にですね，普段の生活の中に，少し，１回でもアイヌ語を言うっていうような時間をですね，作っていただいたら，アイヌ語の復興に役立つのではないかなということで，簡単なアイヌ語のフレーズ紹介っていうことを目的としたプログラムということで，二つのプログラムを行っております。

ウポポイ以外での取り組みと言いますと，様々なアイヌ語の取り組みをさせていただいております。2017年ですね，今から五年前はSTVのアイヌ語ラジオ講座，１年間のアイヌ語のラジオ講座というものが，今でも行われておりますが，その講師を一年間務めさせていただきました。翌年の2018年からはですね，地元のアイヌ語の入門講座，初級講座ですね。こちらは，どなたでも参加できる，地元の方でも地元の方以外でも，その開催している時間に来ていただければ，アイヌ語講座に参加できるというものになっております。毎年１年間のスケジュールで一年ごとにリセットされるのですけども，講師を務めさせていただいて六年目になります。

最後は，アイヌ語指導者育成事業ということで，こちらもアイヌを対象にした，次の講師となるような人材をどんどん育てていきましょうという事業なのですが，そのアイヌ語指導者育成事業の講師を2019年から，インターンで１年間の勉強期間を踏まえて講師として今も関わらせていただいております。なのでウポポイ以外でもアイヌ語に関わる業務ですね，そういう取り組みに参加させていただいております。私はアイヌ語について，今は興味・関心があって，アイヌ語のことについて業務もしているのですけれども，今回のシンポジウムにあたって課題

を二つほどお伝えさせていただければと思っています。

一つは，「言葉というもの，目に見えないものがいかに重要かっていうものをアイヌがアイヌ語を重要だっていうふうに感じてもらうためには，どのようなことをしたらよいか？」ということをお伺いしたいです。これは目に見えないもの，また今はこう生活の中においてアイヌ語が必要とされる場面っていうものは非常に限られていて，まあアイヌ語がいかに大事かっていうものが，客観的にもわかりづらい状況ではあるのかなと思っております。アイヌ語ができるから何か自分に良い点があるかって言いますと，まあそうでもないのかなと思っていて，その「目に見えない，評価がしにくい，また学習成果がわかりにくいようなものっていうもの，言語にかかわらず目に見えない文化をいかに重要なものであるっていうふうに位置づけるためには，どのような発信が大事なのか？」っていうものを教えていただければ幸いです。

もう一つは，似たような話にはなってしまいますが，その世代によって，言語にかかわらず文化に対して考える考え方とかですね。そのものに対しての思いっていうものは違うと思うのですが，幸い先ほどの経歴の説明の中でも私は制度として勉強させていただく機会っていうのが長い時間あったのですけれども，今の若い世代っていうのは，学習する環境が整っているので，割と言語に関しても意欲的な姿勢の方が多い印象はありますが，世代によっては歴史的な背景を見ます，あまり肯定的ではない方もいらっしゃるっていう中で，その人たちをないがしろにして，盛り上がっている世代だけが，どんどんこうアイヌ語に対して活動していこうっていうのはあまり良くない，すごく失礼なことになると思います。どの世代も，また世代でわけてしまうのは安易かもしれませんが，否定的な気持ちを持っている方，個人含めてそういった人とも気持ちをそろえて，こういった自分たちのアイデンティティを残して行く上で，どのようなことに気を付ければいいのか？」また，「マオリの方々が教育の中で，そのようなギャップ，世代間のギャップなどがあった時に，どのように解決，または軽減してきたのか？」っていうお話を伺えたら嬉しいです。また，アイヌ語はネイティブの方，ネイティブスピーカーから教わるっていうものは非常に厳しい状況であります。そういった中で，「言語復興ということを始める上で，どなたを対象に，どういったことから始めるのが一番良いのか？」っていうことも，もしお時間がありましたらお話しいただけたら幸いです。簡単ではございますが，私の発表は以上とさせていただきます。イヤイライケレ。

4．マオリとアイヌの人々との「対話」：アイヌのパネリストへのコメント

岩佐：酒井様，岡田様，山丸様，発表をどうもありがとうとうございました。お二人の先生からコメントやアドバイス等がございましたら，共有をよろしくお願いいたします。まず，Alison先生，酒井さんのお話を聞いてどう思われましたでしょうか？

Alison：イランカラプテ，酒井さん，岡田さん，そして山丸さん，皆さまの発表，お仕事についてのお話に非常に感銘を受けて聞いておりました。ありがとうございます。皆さまの活動に対して心からの敬意を表したいと思います。そして若者に対してですが，酒井さんからもお話がありましたが，どうやって文化を継承して行くのかというところですが，多くの若い人たちが言語や文化をアクセスできるようにするということ，その観点に関しましては，私が言える

こととしては，ニュージーランドでも似たようなことが起こっているのですけれども，Te Kawehauさんに伺いたいのですが，彼女の方が先住民ですので，それに関してやはり実際に経験したことだと思うんですね。酒井さんのご質問，非常に深い質問だと思いますので，私からというよりは，皆さまの活動に関しては本当に心から尊敬をしたいと思いますが，ご質問に関しましては，Te Kawehauさんから話していただいた方が良いかと思います。

Te Kawehau：皆さまの発表を伺いまして，私の心がとても痛みを感じました。本当に色々な体験されてきたんだと，現在でも多くの問題に直面しながら活動されていることがわかりました。そして，皆さまがここまで辿ってきた旅，道のりを発表を通して感じ取ることができました。ありがとうございます。

また，皆さまがそういった話を共有して下さったこと，皆さまの文化についてお話をいただいたことを聞かせていただいたことを本当に嬉しく思っています。簡単に答えられるような質問ではないのですが，皆さまのお話は大変に深いお話ですし，またストーリーがたくさん感じられますけれども，まず私が言えることとしましては，まず踊りです。皆さまがコミュニティの中から集まった人たちと一緒に踊っていく，喜びのために行っていたということですけれども，それを観光の方に向けているという現象に感じました。ニュージーランドのマオリの活動でもマオリの人々は，おそらくこういった場面もありますが，どちらかというと，やはり自分たちの楽しみのために踊っている人が今でも多いと思います。もちろん，その中には失われてしまった踊りもあると思いますけれども，家族の集まりであって，何かの機会に踊ることが多いと思います。

私たちのルネッサンスというか，文化の再生，そして踊りをみんなに見せるということ，それが文化の再生にもつながるという考え方をしています。観光だけではなく，踊りを人に見せる，例えばコンペティションで，何かの大会をすることです。ハカとかそういった踊りを大会を通じて見せるということも，やはり文化の再生につながるという考え方を持っています。酒井さんが言われていた通り，なぜ私たちが自分たちのために踊るのか，という考え方も本当に大事なことだと思います。その思いを若い人に伝えていくこと，踊る理由というのを伝えることも重要だと思います。その中で彼ら自身のことを表現していく，その一つのやり方なんだよっていうことを伝えることが重要だと思います。

30年ほど私もこういった経験をしていますけれども，若い人たちの関心というのは，その踊りに対する関心のあり方，人の前で見せる，学校で見せる，もしくは大会等で踊りを見せるという，その思いというのは，その踊りをまた自分たちの生活やコミュニティの中に戻す役割もあると思うんです。他のところで，学校や社会で踊るということの経験が，自分たちの地域の踊りを見直すきっかけになる，という考え方を私たちはしています。若い人たち，酒井さんが言われている若い人達，今は観光のために行っている人達というのも，自分達の楽しみを失っているということではなく，それが自分たちの楽しみのための踊りへの思いを育てることにつながっていると思いますので，言われていた「楽しみのための踊り」を取り戻していただければ，本当に良いと思いますし，彼らと話をする中で前に進んでいただきたいと思います。そういう思いを伝えていくことが楽しみであり，楽しみの踊りに戻ってくると思っています。

そして言語についてもお話をなさっていたかと思いますが，山丸さんですね。言語の話をさ

れていましたけれども，マオリの歴史を見たときに，およそ５％の人たちがマオリ語を流暢に話します。現在どれくらいの方がアイヌ語を流暢に話すのかわかりませんが，おそらく流暢に話す人はあまり多くないのではないかと思います。ネイティブとして話してる方が多くないと思うんです。それで，伝統的な話し方で話すこともほとんどの人ができなくなったと思います。けれども，やはり皆さんが今，行っている仕事というのは非常に大きな役割があると思っています。アイヌ語の新しい言葉を作っていくこと。そして，その言葉を現在の形に合った形で多くの人に伝えていく，これは言語を保存することにもつながっていくと思っています。ですから，ぜひ他の方々に対して，もちろん年長者，若い人，子ども，どのような方でも構いませんけれども，できるだけ多くの人にその言語を使っていただける機会や，そういう環境を整えていくということがやはり重要だと思います。例えば，レクチャーや儀式の中で実際にアイヌ語を使う，そしてコミュニティの中で使っていく。そこにもっと多くのアイヌの言葉を使うチャンスを提供する，ということです。そういう触れる機会を増やして行くことで，積極的な動きが生まれていくのではないかと思います。小さなグループと一緒に，例えば子どもたちとか同じくらいの子どもたちとか，それから同じ若者とか，それから年長者とか一緒にやって行くような機会はあるでしょうか？私たちが「ワナンガレオ」でやっているように，小さなグループで言語を学んでいく「言語の巣」というものでやっていくことができると思います。

集まりを作り，お互いに学んでいきますが，その中でマオリ語だけを話す，ということをやっています。「マオリ語だけで話さなければだめだよ」，ということをやっていくことが非常に重要だと思います。これはイマージョンをしてるんですが，マオリの言葉だけにすっかりと浸っていくようにして話させるということです。最初はそれに少し戸惑うことがあるかもしれませんし，ちょっと恥ずかしいと思うことがあるかもしれません。そういうことが起こりますが，このようなことをやっていくと起こりえることです。

私の祖母はマオリ語を話していましたけれども，私の父の世代になって私の祖母は，父に対して全くマオリ語を話そうとしませんでした。ですので，父の世代はマオリ語に接する時間がなく，あまり機会もありませんでした。私の世代になって，マオリ語を改めて学び直さなければなりませんでした。私は今でもマオリ語を学んでいます。学びということについては終わりがありません。それは，最初から話していたわけではないからです。ですので，皆さま方の気持ちがよくわかります。私は自分の娘を育てる時，マオリの言葉も教えようとしましたし，家ではできるだけマオリ語を話そうとしています。またマオリのお話も話しています。そして私が希望するのは，子どもたちにまた，息子がいるんですけれども，マオリ語をさらに話して孫にも伝えていけるようにすることです。そうすると，それがまた言語を伝達するということにつながると思います。娘が，マオリではない人と結婚すると，言葉というのはどうなるかというと，それは少し後戻りすることになってしまう可能性もあります。マオリは，マオリ語を残そうととても努力しています。それは，単に学校で使うだけではなく，家でも使っていくということです。これは非常に難しいことになりますので課題になります。そして，どのようにアイヌ語を習わせるのか，幼稚園で，あるいは小学校でアイヌ語を話すこと，コミュニティや学校で，そして家庭で話すようにすること。これは本当に大きな仕事になります。そしてまた，それには手助けが必要です。どのような手助けが必要なのかということについて，私も興味があるんですけれども，お互いに手助けしながらやっていく必要があります。

最後に，皆さま方の話で興味を持ったのは，皆さま方の名前ですね。ニックネームとおっしゃってましたね。岡田勇樹さん，面白いお話をしてくださいました。そしてまた，皆さんが大学で行っていることですね。アイヌの学生がいるクラブ，ウレシパクラブですね。そしてその中でいろいろ活動を行っているということを話してくださいました。私がこれについて知りたいのは，大学でアイヌの言語と，そしてアイヌの文化を学べるということですけれども，誰が先生になっているでしょう？大学で教えてくれる方はどなたでしょうか？そしてそれは，そのような大学でのプレッシャーに対して，どのように関わっているでしょうか？生徒が抱えるプレッシャーですね。

まず，アイヌの文化のリソースのために，どのような資源を得ることができるのか，またどのように手助けされているのか，ということです。マオリにおいても，私たちは様々なことをやってきました。私たちは，どのようにバランスを取っているのか，そしてどのようにマッチさせていくのか，どのように政治家を巻き込んでいくのか，という多くの様々なことをやってきました。そしてそれをまとめながら必要な物，サポート，そしてまた資源，リソースですね。学生が大学でアイヌ文化を行っていくために，組織的にやっていかなければなりません。大学として，それをどのようにまとめてやっていくかということが，様々な手助けになっていきます。時には，なかなか難しいこともあると思いますので，私たちも時には難しいことやなかなか上手くいかないことに対して怒りを覚えることもあります。

Alison：これに少し話を付け加えたいところがあるんですけども，岡田さんありがとうございます。大学において，よくあるのですけれども，これは私たちの大学の歴史を見ると，マオリのことについて，この怒りというものを感じることがあります。このような様々な要求をされることに対してです。こようなことが起こる場合は，非常に重要なことは何かというと，友達と協調しながらやっていくことです。日本人でもいいですし，また，これは主流の文化の日本人からでもいいですけれども，協力していくことです。ニュージーランドでも，過去にとても強力なマオリではない教授がいました。その教授が行ったのは，先住民に対する「声」を強化してくれたことです。非常に大きな手助けをしてくれました。ですので，皆さんもそのような非常に力のある同僚の方，そして大学にそのような協力してくださる方がいらっしゃるといいと思います。

Te Kawehau：はい，素晴らしいポイントだと思います。私たちの大学には，非常に強いマオリのグループがあります。彼らは，集まってそこで文化などのダンスをやっていきながら，お互いに支え合っています。様々な試験を受ける時にも，様々な大会や委員会に参加する時にも，大学に対して影響力をもたらすためにお互いに協力し合っています。どのようにマオリのことをわかってもらえるか，そしてマオリからの影響力を向上させていくか，ということについて，私のオフィスもサポートをしています。そして，これらのことを持続可能なやり方で行っていけるようにしています。

また，このグループのマオリの学生は，通常の卒業式とは別なマオリの卒業式も行います。学生たちは，グループを作り，自分達で組織を作り，特別な式を行います。それはとても特別な日になり，家族やコミュニティを巻き込みながら，ドレスアップして伝統的な儀式を行い，食事やお祝いを行っています。大学も協力し，コミュニティも家族もポジティブに私たちの文

化を見ています。

そして最後になりますが，私たちが大学で行っていることに関して，反マオリの人たちがいます。マオリの知識に関しても，マオリの知識なんて見たくないという人がいます。大学で今でも私たちはこのような議論をしてきましたが，現在も続いています。そのような人は，多数派でありませんけれども，それはまあ，大抵は年長者の男性で，科学に基づかないようなことを言っているわけです。マオリの知識なんかはレベルが低く科学に基づいてないとか，そのようなことを言ってくるわけです。しかしながら，私たちが幸運だったのは，30年間マオリが文化とその価値を大学の中で伝え続けてきたことです。そして，マオリの人々が大学の中で少数派であり端に寄せられますけれども，そこに存続し続けていることを主張し，どのように上司やすべての同僚と組織化していくのか，またどのように学生をリクルートしていくのか，ということをやっています。そして，サポートしてくれる人たちを見方につけて，学生の中でサポートしてもらい，そして何をやってるのかということを理解してもらいます。このようなことをベースに行っていくことが大切だと思います。

5．アイヌのパネリストからのコメント

岩佐：どうもありがとうございました。少し時間が押していますが，ホスキンズ先生，ジョーンズ先生のお話を聞いて，酒井さん，岡田さん，山丸さん，すみませんがお考えを聞かせていただけますでしょうか。

酒井：ホスキンズ先生，アリソン・ジョーンズ先生，本当に貴重なご意見をありがとうございました。今，先生たちからいただいたお言葉を胸にこめて，そしてこれからも保存会の若い人たちと話をしながら前に進んでいきたいと思います。今日はありがとうございました。

岡田：アリソン先生，カウェハウ先生，非常に貴重なお話ありがとうございました。色々参考になることがありました。協力者を作っていく，大学を巻き込んでいくっていうことに関しては，これからもやっていきたいと思います。後一点なんですけれども，先ほどアイヌ語での取り組みでアイヌ語であだ名をつけるっていうのは，まずあのウポポイで始まった事を我々もちょっとそれを真似をしてやっている，というところで，私もアイヌ語名がありまして，チャペトラっていうんですけれども，アイヌ語でチャペトラ。まあ，日本語での意味は「猫を連れている，猫を飼っている」っていう名前なんですが，まあ，そういったようなことで，ウポポイなどがやっていることを参考にもしています。お二人とも今日はありがとうございました。イヤイライケレ。

山丸：アリソン先生，テ・カウェハウ先生，本日はありがとうございました。そうですね，言葉についてのお話を貴重なお話をありがとうございました。やはり，こう話す環境をどんどん作っていくっていうのは非常に重要なことかなと思っていました。私のアイヌ語の取り組みですね，ウポポイでは一人でやっているわけではなくて，数名の担当スタッフと一緒にやっております。それで，私と一緒にやっている方は，結婚されていてお子様たちも三人もいるんです

けども，そういったウポポイで働くお父さん，お母さんを見ている子どもたちっていうのはやっぱりアイヌ文化に関してはすごい良い印象で自分たちも親のように踊ったり，言葉を話したいっていうすごい前向きな意見を持っている子どもたちがたくさんいて，そういった子どもたちの姿っていうのは，僕たちにとっても非常に背中を押してくれる存在っていう事で，下の僕よりも若い世代ですね。非常にこれからも大切にして行きたいなと思い，尊敬されるような存在になりたいなと改めて思いました。今日はありがとうございました。

6．マオリ研究の変遷からみたこれからの教育の役割

コメント：深山直子　東京都立大学人文社会学部 准教授



専門は，社会・文化人類学，オセアニア地域研究，先住民研究。

東京生まれ，東京育ち。院生時代よりオークランド南部郊外を拠点に現代における先住民運動やマオリ社会・文化の変化について調査研究を行っている。2004～05年，2005～06年に，オークランド大学マオリ学部に訪問研究員として所属。

テーナー・コウトウ・カトア，イランカラプテ。深山直子と申します。最初に，今日，貴重なお話を「対話」という形で聞かせてくださいましたホスキンズ先生とジョーンズ先生，それからアイヌ民族として教育あるいは研究に携わる立場から大変貴重なご意見をシェアしてくださった，山丸さん，岡田さん，酒井さんに，感謝申し上げたいと思います。本当にどうもありがとうございました。大きく二つに分けてコメントさせていただきたいと思います。一つ目として，アオテアロア／ニュージーランドの状況について補足を加えながら，ホスキンズ先生とジョーンズ先生の「対話」に対する感想を申し上げたいと思います。それから二つ目としては，アイヌ民族のパネリストのご活動，あるいはご意見を踏まえて，アオテアロアと日本を比較しながら，雑感をごく簡単にお話ししようと思います。

まず一つ目についてですけれども，アオテアロアではこの半世紀ほどの間に，マオリが先住民族としての地位を確立して，それに基づく諸権利や諸資産を獲得してきたと捉えています。国家もまた，基本的には制度改革によってそれを支持・促進してきたような状況があります。この間に，マオリの教育・研究も大きく変容してきました。例えば，先生方がご研究なされたことでもありますが，1970年代以降は，各大学でマオリ研究に特化した学部，すなわちマオリ・スタディーズ学部等が設置されています。それから1980年代以降は，マオリ保育園，コハンガ・レオを皮切りに，あらゆる次元でマオリ語，マオリ文化，マオリのやり方を浸透させたような，いわゆるマオリのトータルイマージョン教育というものが拡充していきました。これによって，以前は主流であった「非マオリによる非マオリのためのマオリに関する研究」というものは，後退したようにみえます。1999年にリンダ・トゥヒワイ・スミスが記した，『Decolonizing Methodologies』，直訳すると『方法論の脱植民地化』という有名な書籍がありますが，そこで彼女が提唱した「Kaupapa Māori」を一つの理念として，マオリの間のみならず，国家や大学でも，いわゆる「マオリによるマオリのためのマオリに貢献する研究」を少なからず意識する

ようになったわけです。このことによって，教育の諸制度の改革がさらに進んでいきました。

ホスキンズ先生とジョーンズ先生の「対話」あるいは論文からは，お二人は，この1970年代以来のマオリ研究，あるいはマオリ教育の方向性を「indigenous inclusion」，つまり「先住民族の包摂」と呼ぶなかで，これを到達点とは決して考えず，これに満足することなく，さらに次の段階を目指すべきだ，と考えていらっしゃるのだと理解いたしました。

私自身は2000年代初頭にオークランド大学マオリ・スタディーズ学部に所属していたために，いわゆるここで先生方がおっしゃる，「先住民族の包摂」の研究・教育をわずかに経験した，といえるかと思います。その当時，オークランド大学はすでに，「マオリによるマオリのためのマオリに貢献する研究・教育」を包摂し始めてから久しく時間が経っていました。しかしながら，大学あるいは非マオリのスタッフは，確かに異文化としてのマオリ文化に基づく研究・教育を許容しながらも，どこか他人事としてそれを傍観している感じであったように，思い出しています。マオリのスタッフもまた，かつて奪われた自分たちの研究を取り戻すために，やむを得ないながらも，時にやや排他的になることもあったかと思います。事実，私はマオリ・スタディーズ周辺で時々，非マオリである私がマオリを研究するということに関して，よいと感じていないと思われる方々にも出会いました。他方，ホスキンズ先生とジョーンズ先生が目指す研究・教育の「indigenising」, すなわち「先住民族化」とは, そのような「先住民族の包接」とは，似て非なるものです。十分に私が理解できているかどうか自信がないところではありますが，私自身は大学，あるいは非マオリのスタッフが，マオリ文化の少なくとも一部分を常識化，ノーマル化すると同時に，自らをマオリあるいはマオリ文化との関係性の中で位置づけ直し，それらとコミュニケーションを続けるなかで，研究・教育を更新し続けていくことなのではないか，というように理解しています。「マオリと非マオリ，双方の対話による双方のための双方に貢献する研究・教育」とでもいえましょうか。

私が特にここで注目したいのは，お二人の研究・教育の場における「先住民族化」，「indigenising」は，関与・対話，プロセス，関係性を核にしているという指摘です。それは私の言葉で言うならば，大学も非先住民族も，先住民族の存在や文化を他人事として傍観するのではなく，自らもまた，いずれかのかたちの当事者として，我が事として考え続けること，ということだろうと思います。ここで見逃せないのは，そのような意味での学びは学ぶ者にとって，必ずしも居心地のいいことばかりではない，ということでしょう。例えば，自分の祖先が過去の不正義に関わっていたという事実を知ることもあります。あるいは，学べば学ぶほど充分な理解ができないということを痛感することもあります。換言すれば，世界，そして歴史の複数性というものを認めて，「居心地が良くない」，「分からない」からこそ，対話を通じて学び続けることの意義を，主張しているといえましょう。お二人の論文，あるいはお話で印象的な表現として，「comfort with discomfort」，「居心地の悪さに心地よくなる」という表現がありましたが，そのスタンスこそが，「先住民族化」された，「indigenise」された教育・研究での肝であり，アイヌ研究・教育においても最も重要なところであろうと私は理解しました。

二つ目のコメントです。アオテアロアと日本の比較をして感じるところということですが，実際には，先住民族の教育あるいは研究に関して，この二国を単純に比較することはとても難しいことだと考えています。アオテアロアにおいて，そのような教育は先ほどお話ししたように,「先住民族の包接」から「先住民族化」へと変容しつつあるわけです。それは単独で起こった出来事ではなくて，国家が植民地化という歴史を直視し，先住民族マオリの扱いを大きく変

えていくなかで，マオリが権利の回復，諸資産の獲得，文化の復興を進めてきたという，大きな動きと連動するものだったと捉えられます。他方日本では，アイヌの先住民族としての地位を確固とするための法的・政治的動きは，近年こそ活発ともいえますが，アオテアロアと比べると遅々としていると言わざるを得ず，加えてなおも狭義の文化振興に留まる傾向が強いといえそうです。アイヌに関する教育は，十分に法や政策に支えられているとは言い難い環境のなかで，酒井さん，岡田さん，山田さんに代表されるように，個々の現場における有志の努力と創意工夫でなんとか成立しているという側面が非常に強いというところがあります。

また，「indigenous inclusion」，「先住民族の包接」という段階さえ，ごく限られたところでしか行われていないなかで，率直に言えば日本では，「先住民族化」という次元を想像するのがかなり困難ということも，指摘しておきたいと思います。ただしその一方で，法的，政治的動きを飛び越えて，教育という現場でできることもあろうとも考えています。それは，「先住民族化」という概念に着想を得ながら，限定的とは言え，アイヌ文化が当たり前の環境を作り，アイヌはもとより和人を始め非アイヌも置き去りすることなく，アイヌ文化との関与・対話の中で，豊かさ，安心，プライドを育んでいくことではないかと考えています。この際に，アオテアロアで1980年代初頭に，先ほども言及しましたが，マオリ保育園，コハンガ・レオという教育の現場が，まさにマオリの部族や個人を中心としてグラスルーツに立ち上がり，結果としてマオリ教育の改革を引っ張っていった事実が思い出されます。先住民族が主体となる，個々には小さな教育の現場が持つ可能性というものに，思いを馳せるわけです。先住民研究を専門とする一大学教員としては，その可能性や豊かさを，アイヌ，そして和人あるいはそれ以外に，どのように伝えていけるのか，アピールできるのか，その方策を真摯に考え続けたいと思っています。キア・オラ，イヤイライケレ，ありがとうございました。

7．おわりに

本シンポジウムは，アオテアロア/ニュージーランドの先住民族教育について，ホスキンズ氏とジョーンズ氏の講演から始まり，予定していた講演のスタイルは2人が別々に行う予定だった。しかし，直前になり講演をそれぞれの立場と視点から交互に行うスタイルになった。そのことで，教育の歴史が植民者側と被植民者側の両方の観点から描かれ，また，「先住民族の包摂」と「先住民族化」の違いについても，先住民と非先住民というそれぞれの立場から語られていた。講演では，ニュージーランドの教育の歴史を凝縮してたどりながら，教育現場での「先住民族の包摂」と「先住民族化」というマオリの人々への2つのアプローチの共存と移行について，実際の事例を通して紹介があった。ニュージーランドの「教育」という1つの分野が，先住民族と主流社会という二つの社会が持つ「二元性」の観点から語られていた。それは，「二元性」のある現実を，どちらか一方に統合（包摂）してしまうのではなく，その現実を直視し，「どのようにするとマオリ社会と主流社会の双方の発展につながるのか」という教育の問いを，相互の「対話」から模索し，「未来を見据えた互恵性のある教育とは何か」ということを試行錯誤しながらも見出そうとしていることがとても印象的だった。

北海道に在住するアイヌの人々の現在の教育には，アイヌの歴史が影響している“年代差”，アイヌ文化が持つ本来の“地域差”，アイヌ語という学びの機会と時間が反映する“経験差”

が存在し，多様性が生じている。このような多様性を持つアイヌの人々の中から，今回のシンポジウムでは，①アイヌ文化の伝統と文化伝承を行う「場」，②アイヌの若者の高等教育機関という「場」，③アイヌ語・アイヌ文化の伝承を学びながら社会の中で実践し発信するという「場」，という３つの「場」の背景を持つ３人のアイヌのパネリストの「声」で個々の現状と課題が語られていた。そして，最後の深山氏によるコメントでは，アオテアロア/ニュージーランドにおける先住民族教育，マオリ・スタディーズを実際に現地で経験し研究を行ったという立場から，オークランド大学の二人の教育者の講演をマオリやアイヌではない第３の視点から講評し，両先住民族が置かれた状況の様々な違いとその状況を乗り越えるための指摘と助言があり，アイヌの人たちによるこれからの教育への展望が語られていた。

先住民族教育という教育は，先住民族だけが学ぶ教育ではなく，主流社会側も同時に学ぶ必要があり，ある意味で主流社会側にとってより必要な教育であることを本シンポジウムを通して再認識した。また，先住民族教育は，１つのテーマを２つの視点と方法で行う必要がある教育であり，今回の講演のようなco-teachingという教育方法が必要であることにも気づかされた。今回は，先住民族であるアイヌとマオリの人々の「対話」が時間的に限られていたが，先住民族同士の教育に関する「対話」の始まりになったと考えている。そして，この「対話」の第２回目が2024年７月にホスキンズ氏，ジョーンズ氏の北海道訪問によりアイヌのパネリストと対面で行われる予定である。先住民族が持つ課題の共有と解決につながる「対話」という相互作用を通して，これからのアイヌの人々の新しい教育の創造につながっていくことを期待している。

最後に，本シンポジウムに多忙な中でご参加いただいたオークランド大学のジョーンズ先生，ホスキンズ先生に，またパネリストとして参加していただいた酒井氏，岡田氏，山丸氏に，そして貴重なコメントをいただいた深山先生に心から御礼をお伝えさせていただく。また，本シンポジウムをサポートしてくださった教育学院博士課程の井上みのりさん，（株）イー・シーの同時通訳の方，そしてオンラインで視聴していただいた国内外からの視聴者の皆さまにも心からの感謝の意をお伝えさせていただきたいと思う。イヤイライケレ。

〈参考文献〉

[1] 岩佐奈々子．2009.『都市部に住むアイヌ民族の人々のライフストーリー：自己肯定の経験を通して』．北海道大学大学院 教育学研究科 修士論文．北海道大学.

[2] 小内透編．2010.『現代アイヌの生活と意識－2008年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書－』．北海道アイヌ・先住民研究センター.

[3] 岩佐奈々子．2018.『アイヌの人々の「新しい生き方」の語り－自己の二重性を乗り越える経験から』．日本オーラル・ヒストリー研究 第14号 2018．日本オーラル・ヒストリー学会（JOHA）：151-172.

[4] 岩佐奈々子．2019.『アイヌ民族の人々の主体形成につながる創造的学習：課題提起学習としての“Simulation Game, Project PAL”の開発と実践』．北海道大学大学院 教育学院 博士論文．北海道大学.

[5] Hoskins, T. K., Joines, A. 2022. Indigenous Inclusion and Indigenizing the University. New Zealand Journals of Educational Studies. Springer.

※本シンポジウムは，日本学術振興会：科研費（21K13521）の研究成果報告の一部になる。

Dialogue between “Indigenous Inclusion” & “Indigenising” for Listening to Indigenous Voices of Māori in Aotearoa/New Zealand and Ainu People

— Report: November 2023 Online Symposium —

Nanako IWASA

Key Words

indigenous education, indigenous inclusion, indigenising, Māori, the Ainu

Abstract

Currently, general education for the Ainu as Japanese is provided under the public education system, with specific education to the Ainu people focused on Ainu language and culture continuing under the Ainu Policies since 1997. However, education for the Ainu as “indigenous people” has not yet been established in the current educational systems and academic/research fields titled “Indigenous education” or “Ainu studies” in Japan, as seen in foreign countries.

In consideration of the future education for the indigenous Ainu, this report introduces an online symposium held in November 2023. In the program, two educators from the University of Auckland in Aotearoa/New Zealand presented a case of indigenous education for Māori, and three Ainu panelists described their current issues and their challenges they face now in local regions in Hokkaido. Then, the five panelists engaged a ‘Dialogue’ on indigenous education by the Ainu people. Finally, the outlook for education for/by/with indigenous and Ainu people were mentioned by a specialist/researcher of Māori studies.